

エッセイ

「由緒正しき異界の現在—マイノリティの街、梨泰院」

安田ひろみ

<消えた猥雑なまでの生命力>

調査実習で1年ぶりに訪れたソウルはあまりに洗練され、都市ごと公園のように整備されてしまったという印象だった。同慶とすべきことに「しまった」などと不遜な言辞を弄するのは、再開発の強引さを指弾する訳ではなく、美しく秩序だったソウルに一抹の寂しさを感じるからである。学生たちは、立派な地下鉄やホテル、清潔な町並みにむしろほっとしたらしい。不衛生、不合理、不便、危険は、免疫のない今時の若者の多くにはもはや楽しむべき対象ではないようだ。一部の隙も無くお洒落なカフェやブティックが建ち並ぶ仁寺洞や、エコロジカルな再開発モデルとして各国の自治体関係者が見学に来る清溪川公園を「きれいよかった」と無邪気にコメントする彼らに、この心情を分かって貰おうというのが無理かもしれない。

ソウルは訪れる度に土地勘も狂うほど近代化に向けての変貌を遂げてきたが、ここに極まれりの感である。私が初めて訪韓した1986年は、アジアの最貧国から新興工業国へと駆け抜けた「漢江の奇跡」の激動も既に過去のものとなり、中進国としての自信を得て今後は着々と先進国への仲間入りを果たそうとしている時期だった。謂わば国として落ち着き始めた時代であったが、それでも街には人々の活力と騒音と無秩序が満ち、東京とは全く違う“アジア的”混沌の世界だった。近代的な高層ビル群の下

で乞食たちが逞しく商売に励み、広大な邸宅街の直ぐ傍に「タルトンネ」（月の村）と呼ばれるスラムが、壊されても壊されても場所を変えては出現する。露天商であれシャーマンであれ社長であれ、どの階層の人々も未来の成功を信じて、あるいは法をかいくぐり創意工夫し努力していた。

この時期に韓国の魅力に嵌ってしまった人は多いのだが、オリエンタリズムと言われると少々反論したくなる。というのは、都市の猥雑なまでの生命力という魅力の核心が韓国人の個性だったからである。60年代からソウル留学した数少ない日本人である長璋吉は、当時の韓国を「人間性の露天掘り」と評した。型にはまった日本人と異なり、当時の韓国には今風に言えば「あり得ない」、あまりにも個性の突出した人々がゴロゴロしていた。自由奔放過ぎるファッションや髪型や言動。良くも悪くも自信と確信に満ち、雄弁で民族意識に溢れ、学歴など無くても多くの人が独自の「思想」や「事業構想」を持っていた。政治経済の組織化や法整備が徹底していなかった分、社会の隙間を個人の見識と力量で生かしたのである。法も権力も信頼できない分、自分を頼みにするしかなかったともいえる。

自分を天才と信じている人、出世や金儲けだけに邁進し、突拍子もない計画に周囲を巻き込もうとする人など甚だしい利己主義者も多かったが、田舎に埋もれて清貧に甘んじ、一心に村人の幸福を計るなど、現代の「ゾンビ」（在野の賢者）として師と仰ぎたいような人徳の士もいた。全て日本

ではあまり見られなくなった類型であり、後者などはもはや宮本常一の『忘れられた日本人』等でしかお目にかかれないタイプだった。隣国というのに何たる違い。同じ儒教文化圏とは言いながら、和を重んじ謙讓の美德を奉じる日本人の目を白黒させるような人も少なくなかったが、彼らが日々エネルギーに活動するソウルには、息苦しい日本社会には帰りたいと感じさせるような魅力があった。

こうした魅力ある個性的な人々はどこに行ってしまったのか。田舎にはまだ健在かもしれないが、都市では、成功した人は洗練された新しい型に収まり、成功できなかった人は失意のうちに大言壮語もできなくなったのだろうか。現在では、日本社会も寛容さを増したが、ソウルでも呆気にとられるような人に会う機会は殆ど無くなり、「薄味」の人ばかりになった。総じて市民の社会化、組織化、意識の均質化が進み、日韓両国の「常識的言動」の幅員が重なってきたのだともいえよう。

<社会の多様化と外国人>

均質化が進んだというのは、あくまでノスタルジックな感性・意識のレベルの話であり、無論学術的なレベルのことではない。むしろ社会的には、韓国は近年、経済的格差が拡大し、「多様な」社会になってきている。97年のアジア通貨危機時、既に45%を越えていた非正規雇用労働者はさらに増加し、現在労働者全体のほぼ半数で推移している。この数字が日本よりも深刻なのは、韓国の非正規労働者の給与が極めて安く、しかも世帯の主な収入を担う30代から40代の男性がその半数を占めているからだ。韓国では主婦などのパート労働は非常に少ないので、非正規労働者のほとんどは契約社員男性である。つまり貧困世帯とそうでない世帯の二極分化が定着しているのである。今年09年の大卒者の正規雇用への就職

率は5割を切っており、もはや大学を卒業しても2人に1人しか大卒に相応した収入の生活は望めない状態だ。

ここに至るまでには、韓国が非正規労働者を大量に導入する産業構造変革で成長を維持したことや、FTA拡大で日本よりも早くグローバル化が進み、雇用が流動化したことがある。これには外国人労働者の存在も無視できない。豊かになった韓国人が3K労働を忌避し始めたことから慢性的になった労働力不足を、88年のソウル五輪以降は外国人労働者が支えてきた。それまでの韓国には外国人は非常に少なく、在留米軍、観光客を始め留学生や駐在員、外交官などほとんどお客さんの存在だった。だが、韓国経済の成長と共に不法滞在労働者が増え続け、彼らの存在は事実上不可欠になった。そのため03年には彼らの一部を合法化し、04年には外国人労働者の本格的受け入れを開始したのである。以降、外国人労働者は年々増加し、現在では不法滞在者約20万人を含め120万人に迫る勢いである。

日本の場合、永住している在日韓国・朝鮮・中国人を除く外国人労働者は50万人に満たないのだから、日本の人口規模の半分以下の韓国に倍以上の外国人労働者が存在するという状況は、如何に韓国社会が国際化、多文化化しているかを物語っていよう。しかも日本のように地方の工場地帯に分散しているのではなく、ほとんどの外国人はソウルとその周辺の京畿道などに集中している。結婚移民として、また移民労働者として韓国人と結婚した外国人も多く、彼らは既に韓国社会の一部を形成しているのだ。だが、これほど目に見える形で増えた外国人も、まだ市民権を得たとは言いがたい。いまだ相次ぐ外国人労働者への人権侵害事件からも分かるように、外国人は韓国ではまだ異人である。「外人」をよそ者扱いしている点では日本もあまり大きな顔はできないが、単一民族意識が極めて高く、かつ父系出自集団を社会の最重要単位とする儒

教的伝統が生活の基本である韓国では、出自集団のメンバーシップを持たない外国人は本質的に異人以外の何者でも無い。もちろん排他的だった以前に比べ、格段に社会に受け入れられているとはいえ、日本とは次元の異なる異人視なのだ。

さて、彼ら外国人はどこにいるのだろうか。嫁不足の地域に来た外国人花嫁は地方に分散して居住しているが、都市ではサンフランシスコのチャイナ・タウンやNYのリトル・イタリーのような外国人街があるのだろうか。

韓国では戦後直ぐに朝鮮戦争が勃発したことや、定住外国人政策が一定せず、特に戦後は厳しく土地所有や生業、新聞発行の自由等の権利が制限されて来た結果、定住していた華人も海外に移住し、世界中にある中華街も育たなかった。ソウル・明洞の中国大使館周辺にかつての中華街の名残が細々と残っているが、この大使館は旧中華民国大使館であり、92年に韓国が一夜にして台湾と断交すると同時に中国と国交を樹立した際、強引に所有権を台湾政府から中国政府に移転したいわく付きのものである。92年当時は、マスコミの反日キャンペーン

の一環として、72年の日本の中国との国交正常化と台湾切捨てを「信義に悖るもの」として口を極めて非難していた最中だったため、まさに啞然呆然とした出来事だった（なお日本への批判は即座に収束した）。残っていた台湾系華人の多くも、この後韓国に見切りをつけたのである。

話題が協道にそれたが、現在、観光客誘致のため、19世紀末に存在した仁川やソウル・麻浦の中華街を復活させる計画が進んでおり、既に一部は実現している。ソウル市の外国人人口は30万人弱で毎年増加の一途を辿っているが、近年は朝鮮族（韓国・朝鮮系中国人）と中国人の増加が著しい。現在では全外国人の中でも中国人は半数近くを占めており、チャイナ・パワーの復興が見込まれそうだ。

中華街以外では、京畿道の広州市や安山市などに外国人集中地区があり、各国の食材や民族グッズを販売する店などがあるが、ソウルで今も続く伝統的な外国人街というとやはり梨泰院（イテウォン）である。

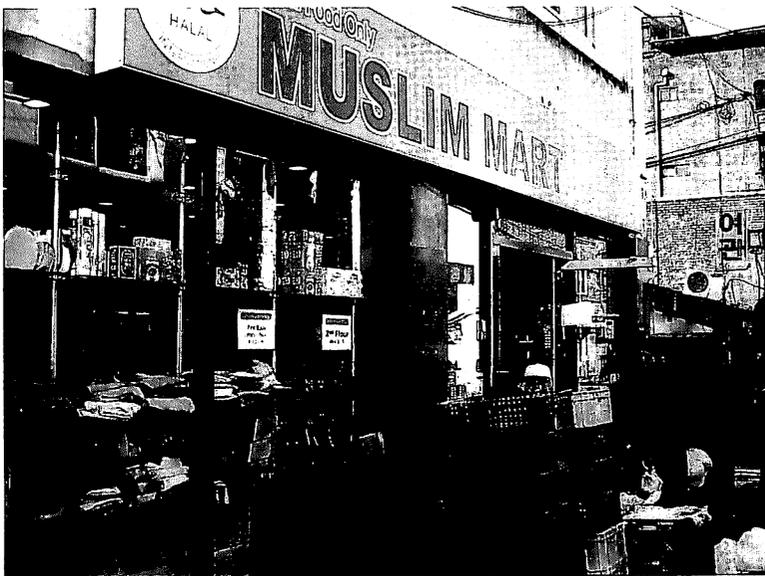


写真1 梨泰院の外国人向けショップ

＜由緒正しき異人の街＞

かつて偽物の街といわれ偽ブランド商品で溢れていた梨泰院界隈は、現在では外人観光客や定住外国人が好んで訪れる「国際街」になっている。偽ブランド品もないではないが、取り締りが強化され買う側にも不法という認識が定着したことから、“李さんと朴さんが作るリーボック”などが大っぴらに売られることは無くなった。米軍の龍山基地に近いため、米兵向けの土産物屋や外国料理のレストランが軒を連ね、米兵相手の売春婦がたむろする「アメリカの街」というイメージは戦後から定着していたが、実はこの街は遙かな昔から外国人の街だったのである。

龍山という地名は梨泰院一帯を指すが、この地の外国人との関わりは度重なる外国の侵略に苦しめられた朝鮮の歴史と重なっている。まずは13世紀、元に征服された高麗時代の末期、龍山は兵站基地として利用された。文禄の役では秀吉軍が、19世紀末の朝鮮事変では清軍が駐屯し、日露戦争では日本軍が兵営を置いた。以後、1945年の解放まで日本軍が軍営とし、戦後は米軍が取って代わったのである。現在、米軍龍山基地には在韓米軍司令部が置かれ、7師団1万5千人が駐留しているが、2014年までに京畿道平澤市へ移転することが決まっている。

軍隊以外の外国人との関わりは、商業である。龍山は漢江から海に通じる輸送上の地の利があり、李朝（朝鮮朝）時代、米穀を扱う特権商人たちの本拠地でもあったため、李朝末期に日本が介入して自由市場となった。自由市場として外国人の居住や通商、宣教の自由が特別に認められ、日、仏、中などの外国人がここで盛んに商業活動やキリスト教の布教を行った。

梨泰院の漢字表記は本来「異胎院」であり、こうした歴史を表した「外国人の地」

といった意味だが、これまで見てきたような軍、外国人、商業、宗教、性というキーワードは現在にも引き継がれている。

梨泰院には中央マスジド（モスク）があるため、外国人の中でもイスラーム教徒との繋がりが強い。韓国にはマンションの一室や民家など、ミナレット等を備えた正式な建物でないものを除けば、他に釜山、安養、光州、全州、大邱に5つのモスクがあるが、ここが最大である。モスクの周辺には、76年の設立以来ハラール食品などを扱うイスラーム・スーパーやトルコ料理やインド料理のレストランができたが、ここ2、3年の間に大幅に門前町化が進んでいた。沢山のハラール・ショップやウズベキスタン、トルコ、エジプト、パキスタン料理などのレストラン、民族服を売る店、メッカ巡礼や故国との往復を扱う旅行代理店、デジタル・クルアーン（電子コーラン）やメッカの方角を指す方位磁石、礼拝用カーペットなどを売るイスラーム・グッズ店が、モスクに続く道沿いにびっしり並んでおり、通称「イスラーム・ストリート」と呼ばれている。昨年には見られなかったドネル・ケバブ屋も露店が2店、店舗が1店開店しており、それぞれトルコ人、アラブ人、パキスタン人の経営だった。これらの店は外国人の顧客を主な対象としており、外国人増加を反映したものといえる。

ちなみに、デジタル・クルアーンは、美声のアラビア語による音声と文字を表示し章毎の頭出しも可能と、聖典の暗記に便利な新兵器である。聖典暗記は敬虔な信徒の義務ともいえるもので、特に非アラビア語圏の信徒にとってこうしたハイテク機器は信仰の力強い味方だ。これは以前中国・新疆ウイグル自治区カシュガルのみスリムから、区都のウルムチで是非買って来てくれと懇願されながら、品切れで期待に添えなかったものだが、驚いたことに全世界に出回っている製品の全てが韓国製だという、意外な韓国産業とイスラームの繋がりを見



写真2 ソウル中央マスジド

た思いである。

現在の韓国人の信徒は、朝鮮戦争でのトルコ軍（国連軍）の従軍イマームの非公式布教から始まる。さらに70年代の国策による中東への出稼ぎ労働者大量派遣時には、現地ですとまった入信があり、89年以降は外国人労働者として来韓したムスリムと結婚した韓国人女性の改宗者が、最近ではイラク派兵時の現地での入信もあったという。この中には、周囲からの圧力や結婚相手の不足から、棄教したりキリスト教に改宗してしまった人も少なくない。韓国人のムスリム、ムスリマの数は08年末現在で公称4万人（韓国イスラム協会）とされるが、結婚で改宗した韓国人女性の増加を勘案してもそれほど多いとは思わず、これはいささか信じがたい数字だ。

だが、現在ではほとんどキリスト教国ともいえる韓国の宗教情勢の中で、敵対宗教と目されるイスラームを自ら選択しそれを維持している彼らは、堅固な信仰を持つ人

が多い。結婚による入信者を除き、彼らの多くは家庭でただ1人のムスリムである。韓国の場合、家庭内にカトリック、プロテスタント（前者は天主教、後者は基督教と呼ばれ、全然別個の宗教と目されている）、仏教、各種新宗教など複数の宗教の信者がいることが多く、家庭内宗教対立の様相を呈することもある。今回、金曜礼拝に集まった韓国人信徒たちに話を聞いたが、ここでのみ会える信徒同士の交流を楽しみに、遠くから毎週通ってくる人々も少なくなかった。その中にシリア出稼ぎで約40年前に入信して以来、ずっと信仰を保っている82歳の男性がいた。毎週1時間以上掛けて、郊外から通っているのだという。家族に理解者はいないが、生涯信仰を続けると淡々と語っていた。

一方、在韓外国人信徒は6万とも10万とも言われ、はっきりとは把握されていない。だが、外国人労働者は今後増加が見込まれることから、外国人ムスリムも増えていくと思われる。彼らの中には韓国以外に出稼ぎに行っている労働者や留学生や外国大使館関係者等、非定住者もいたが、その多くが日本を始め世界各国に親族が居住している。そうした海外ネットワークを貿易や店の商品の仕入れなどに利用しているという。日本から定期的に訪韓するというパキスタン人の中古車ディーラーは、人脈を強化・拡大し商品や出稼ぎ先に関する情報を得ることも、モスクに来る大事な目的の一つだと言っていた。変わったところでは韓国の大手ゼネコン関係者たちが来ていたが、勿論自身がイスラーム教徒ではなくここで中東のクライアントと待ち合わせなのどうか。イスラーム世界の普遍性の中で商業を発展させてきたムスリムの伝統が、韓国でも生かされているといえよう。

＜新たな異人たちの集結＞

異人の街として生まれ、様々なマイノリ

ティを吸収してきた梨泰院には、また新たな異人たちが加わっていた。まずは梨泰院のキーワードの一つ、性に関わるものである。性的マイノリティであるトランス・セクシュアル（TS）の店だ。TSであることが「障害」とは思わないので敢えてこう表記したが、アイデンティティは女性だが身体の変工は望まない、所謂狭義のトランス・ジェンダーもこうした店にはいるようだ。皆MTF（男性から女性へ）の人たちで、日本で言う「ショーパブ」のような飲食しながらショーを見せる店と、彼らのサービスを受けながら飲酒ができる店の2軒が表通りにできていたが、近年梨泰院はこの分野で名を売り始めていることから、裏通りにはもっとありそうである。

韓国は近代までは男寺党など男色を売る放浪芸人集団が存在し、ゲイを許容する伝統があったのに、現代以降はゲイにもTSにも極めて不寛容な社会となった。伝統的なシャーマンの類型がごく一部のゲイ、あるいはトランス・ヴェスタイトを引き受けている程度で、社会に彼らの居場所はほぼ存在しなかった。もっとも、伝統的シャーマンというのは旧賤民としてアウト・カースト的存在なので、これも社会の外部というべきかもしれない。儒教的価値観の外部ともいえる巫俗の世界では、古来家庭内の性的分業の逆転、男性を含むシャーマンの異性装・異性化が特に珍しくなく、そもそも儀礼では女性シャーマンは男装しなければならない。昔からこうした儒教外世界に、性的マイノリティがやむを得ず位置を占めていたともいえよう。

現代ではこれらを除くと、相次ぐ戦争や軍事政権の長期支配、現在も続く国民皆兵制など、男性的な社会の雰囲気とシステムのせいだろうか、新宿二丁目のような場所は存在しないし、ゲイバーのような店もほとんどなかった。身体髪膚を毀損するべきでないという儒教的認識も全くのダブルスタンダードで、美容整形手術には極めて寛

容でも性転換手術など口にするも厭わしいという社会的雰囲気は、現在でもそれほど変わらないだろう。そのため、韓国人のゲイやTSは今でも日本に出稼ぎに行く者が多いという。

だが、軍事色が薄まり、価値観も多様化した現在、異人の租界によく性的マイノリティの居場所ができてきたのかもしれない。ここでなら、オーソドックスでない存在も浮き上がらないし、異人として許容されるだろう。

もう一つの新参の異人は、伝統的シャーマンである。こともあろうに「イスラーム・ストリート」のメイン・ストリートと脇道に3軒のシャーマン寺ができていた。シャーマン寺というのは、仏教の寺の体裁をとった、伝統的巫俗の女性職能者の寺廟である。韓国のシャーマニズムは仏教、道教、神仙道、土俗の山神や龍神信仰などが混交したもので、これらの神や祖霊などを憑依させて、病気治しや占いをする。本来

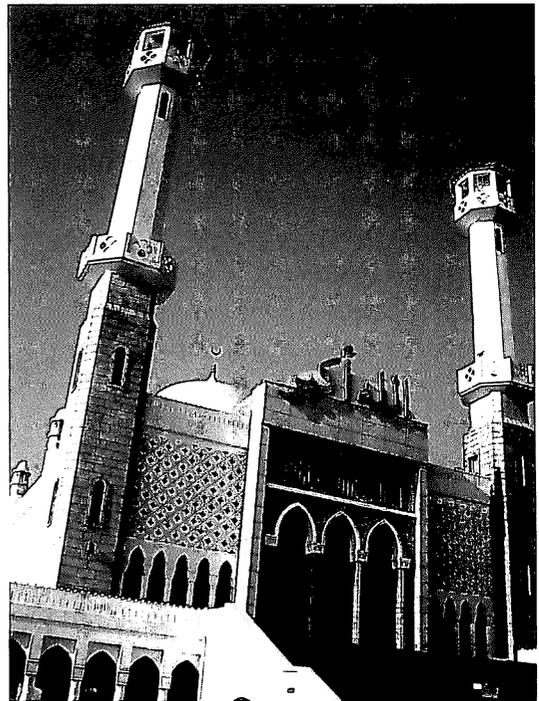


写真3 梨泰院のシャーマン寺

は普通の女性が巫病・降神を経て、先輩シャーマンに弟子入りして成巫するのだが、近年では師につかず自己流に修行や勉強して勝手にシャーマンを称する人も増えた。従って、伝統的とはいいながら、常に革新的でもありえ伝統破壊的でもありうる。これがシャーマン側からは同系統視している仏教から、煙たがられる一因でもある。

寺といっても、資金がなければ民家やビルの一室に卍のついた赤い旗を掲げ内部に祭壇を設ければ事足りるので、どこへでも進出は容易である。韓国の街を少し歩けば、全国どこでもこうしたシャーマン寺が見られる。だから、必ずしもイスラーム街に意図的に寺を構えたとは断言はできない。だが、この狭い地域に3軒というのは、いかにも多すぎる。今回は直接行って確かめる機会がなかったが、支配宗教であるキリスト教に邪教視され、頼みの仏教からも蔑視される立場として、この異人街に居を定めたと考えられる。

伝統的シャーマンの宗教は、エホバの否定、偶像崇拜、多神教、豚の供儀、血のケガレ、女性主導等、イスラームのタブーが満載で、まさにイスラームの対極に位置するものである。だが、近所の敬虔なムスリムに聞いた所、シャーマン寺の存在は全く気にならないという。勿論、モスク側の公式見解は異なるかもしれないが、シャーマニズムはイスラームに敵対できるような成立宗教ではないので、歯牙にもかけないと言ったところだろうか。一方、シャーマン側は何でもありの多神教なので、近隣にモスクがあろうが教会があろうがあまり意に介さない。こうした現状は、ある意味では宗教的マイノリティの共生の例とも言えよう。

さて、ソウルにかつて溢れていた猥雑なまでの活気元である韓国人の生命力は、社会がより洗練されカオスの部分の制度化・組織化が進んだ結果、「分野」に流れ

込んでいる。企業活動、教育、宗教、芸術などの自己表現、スポーツ等々、社会から承認され確立した域内という意味である。企業戦士たちの邁進で韓国企業は海外でも確固たる地位を築いたが、家庭では教育熱がいよいよ加速し、進学校通学のためさらには海外留学のため妻子が別居し、単身生活を送る夫も少なくない。こうした熱狂を精神面で支える宗教もまた熱い。町の教会や寺では早朝祈禱、百日祈禱などに通う大勢の信者たちが常に見られ、信仰の強さの点では日本の比ではない。韓国人の特性であり魅力でもある圧倒的なひたむきさは、依然健在であるといえよう。

だが、分化されきちんと形付けられることは、出口を求めてふつつつとたぎるような人々の生命力を街頭から吸収してしまった。もはや雑多なものが交わり異質なものが溢れかえる場所として、ソウルの街を見ることは難しい。そうした中で、伝統的な異人街として軍隊、外国人、性労働者、外国の宗教等に居場所を提供してきた梨泰院に、性的マイノリティや宗教的マイノリティ、外国人が集まりつつある。社会の変化で行き場を失った異人たち、新たに生まれた異人たちは、異質なものを全て包括するトポスである梨泰院に次々と引き寄せられているのかもしれない。